京都大学	博士(文学)	氏名	白　　海　　提
論文題目	イスハーキーヤの創始者ホージャ・イスハークに関する研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、16世紀後半の中央アジアにおいてナクシュバンディー教団の一支派イスハーキーヤを創始したホージャ・イスハーク（1599年没）の活動を考察するものである。

マフドゥーミ・アーザム(偉大なる主人)という尊称で知られるアフマド・カーサーニーが1542年に死去して後、マフドゥーミザーダと呼ばれた彼の子孫たちの間に、継承問題を繞る争いが発生し、長男イーシャーニ・カラーン（本名ムハンマド・アミーン)と七男ホージャ・イスハークをそれぞれの名祖とするイーシャーニーヤとイスハーキーヤの二派が形成された。彼らはマーワランナフルからタリム盆地のオアシス地帯に進出し、抗争を繰り返しつつ、ついにはこの地域を政治的に支配するに至った。学界ではこの一族を「カシュガル・ホージャ家」と呼ぶ。

ホージャ・イスハークは、一族の内で最初にタリム盆地に巡錫し、勢力を扶植した人物である。彼は父の死後、シャイバーニー朝治下のマーワランナフルからヤルカンド・ハーン国の支配下にあった東トルキスタンに到来し、12年にわたって滞在した。この間に彼がヤルカンド・ハーンの王子ムハンマド・スルターンの帰依を獲得したことは、マフドゥームザーダたちが次々とこの地に進出する契機となり、ナクシュバンディー教団が他の神秘主義教団を凌駕する要因となった。

カシュガル・ホージャ家の歴史において重要な役割を演じたこの人物については、既に多くの事実が先行研究により明らかにされている。先行研究の関心は概ね彼のヤルカンド・ハーン国における活動に限られているのであるが、その間に見逃されている問題も少なくなく、その上、東トルキスタン到来以前とマーワランナフルに帰還して以後の彼の活動については、現在まで殆ど見るべき研究がない。本論文はこうした研究の欠落を補い、新たな展望を拓くことを目的とするものである。

第一章では研究の目的・方法・史料について述べるとともに、先行研究の問題点を指摘し、本論文が考察の対象とする問題を提示した。すなわち、１）ホージャ・イスハークと兄の間の継承権をめぐる紛争の背景と実態、２）この人物を「聖者」とする観念の形成、３）彼のマーワランナフルにおける宗教的、政治的活動、４）ヤルカンド・ハーン国への進出の原因・時期、および先行研究が言及していないこの地における伝道活動、５)先行研究で意見が分かれる問題についての見解の提示、以上である。ことに研究方法については、聖者伝を主たる史料とする理由とその利用の方法について述べるとともに、ホージャ・イスハークの複数の聖者伝の紹介を行った。

第二章では、16 世紀のマーワランナフルの宗教的・政治的状況を確認した。聖者伝によれば、ホージャ・イスハークは歴史舞台に登場以来その死に至るまで一貫して、ナクシュバンディー教団の他の流派を含む諸々の教団と競合しつつ、シャイバーン朝の世俗権力と交渉を持ち続けていた。本章では先行研究に従って、16 世紀 40 年代から 90 年代の末までのシャイバーニー朝の内紛とそれに続く崩壊前の状況を確認したのち、当時のマーワランナフルにおける最も重要な三つのスーフィー教団，すなわちナクシュバンディー，ヤサヴィー，クブラヴィーの盛衰を概観した。

第三章では，主として聖者伝史料に依拠して、マフドゥーミ・アーザム死後に起こったナクシュバンディー教団内部の権力闘争について検討し、ホージャ・イスハークの登場の背景を明らかにした。マフドゥーミ・アーザムは生前に教団の指導者の地位、即ちシャイフ位は預言者ムハンマドの血統に連なる「聖なる家系」出身のシャイフとの父子関係によって継承されるという世襲の観念を創り出した。この観念によって、マフドゥーミ・アーザムの死後、彼の長男イーシャーニ・カラーンは父の指名に基づいてシャイフ位を世襲したが、マフドゥーミ・アーザムの二人のハリーファ（高弟）ホージャ・イスラーム・ジューイバーリー（1563 年没）とマウラーナー・ルトゥフッラー・チュスティー（1571 年没）による指導権をめぐる対立の影響を受け、世襲の地位を長く持ち続けることができず、最終的にその権威をもイスラーム・ジューイバーリーに奪われた。この紛争においてイーシャーニ・カラーンへの影響力を失ったルトゥフッラー・チュスティーはイスラーム・ジューイバーリーに対抗するため、いま一人のマフドゥームザーダであるホージャ・イスハークを守り立て、その世襲権を支持するようになった。ホージャ・イスハークは自分が預言者ムハンマドの聖者性を継承しているがゆえに、父のシャイフ位を継承するに値する最も優れたマフドゥームザーダであると強調し、本来自分に与えられなかった世襲権を主張するようになり、ルトゥフッラー・チュスティーからシャイフの免許を得たのち，シャイフとしての独自の活動を始めた。

第四章では，世襲権を主張するようになってからのホージャ・イスハークの活動の展開を追った。彼の聖者伝に現れる様々な奇跡譚には一見荒唐無稽と思われるものも含め、彼が直面していた現実の問題が反映していると考えられる。ホージャ・イスハークは自分の権威を樹立するために、各地での伝道活動を行なっていたが、教団内外の勢力から反発を受け、さらにはシャイバーン朝の実権者アブドゥッラー二世（1598 年没）から敵視された。世俗権力者の支持を獲得できなかったホージャ・イスハークは親アブドゥッラー二世の宗教勢力の圧迫を蒙り、1578 年頃にサマルカンドを離れてヤルカンド・ハーン国に進出せざるを得なくなった。この人物のヤルカンド・ハーン国での活動は先行研究で既に明らかになっており，本論文では繰り返し考察しなかった。ただし，それぞれ異なる立場から書かれた聖者伝の記録を分析して、ホージャ・イスハークがヤルカンド・ハーン国においてもナクシュバンディー教団に属するシャイフ

と対立していたという従来の研究では言及されていなかった事実を指摘した。

第五章では，ホージャ・イスハークの活動に関して若干の補足を行なった。東トルキスタンからマーワランナフルへの帰還の後，ホージャ・イスハークはヤルカンド・ハーン国のハーンとなった弟子であるムハンマド・スルターンとの連絡を頻繁に行なった。聖者伝と年代記の記述をホージャ・イスハークとアブドゥッラー二世との敵対関係を考慮しつつ分析すると、1594/95年にシャイバーニー朝のヤルカンド・ハーン国に対する軍事侵攻に際して、ホージャ・イスハークはムハンマド・スルターンへの情報提供者としての役割を果たしていたと思われること、また1598年に起こったアブドゥッラー二世の息子アブドゥルムーミンの暗殺事件にもホージャ・イスハークないし彼の信徒たちが関与していた可能性があることを指摘した。最後に、イスハーキーヤの修業方法ズィクルを問題として取り上げた。本論文ではこの問題に関して深く検討できなかったが，先行研究に見られるこの問題に関する相反する諸説を示しつつ，それについて分析を行なった。

次いで附編として、最も早く記されたホージャ・イスハークの聖者伝であるペルシア語の『ズィヤー・アル・クルーブ』の冒頭からおよそ三分の一を二種の写本に基づいて校訂し、その構成と著者ムハンマド・イワズ・サマルカンディーの経歴についての詳細な解題を付した。

（論文審査の結果の要旨）

16-17世紀のイスラーム世界では、同時多発的に様々な「聖なる家系」が出現した。これらの家系の始祖はほぼ例外なくスーフィー教団の指導者（シャイフ）であり、彼らの後裔は、父祖から道統と血統を二つながら継受していることをもって自らのカリスマの根拠とした。1542年に没したサマルカンドの聖者マフドゥーミ・アーザムの一族はこうした家系の典型であり、彼の子孫たちは二系統に分かれて抗争しつつ、チャガタイ裔が支配していた当時のヤルカンド・ハーン国すなわち東トルキスタンに進出して、ついにはイスラーム史上極めて特異なスーフィーが統治する国家を樹立するに至った。本論文は、この一族のうち最初にタリム盆地に巡錫し勢力を扶植したホージャ・イスハーク(1599年没)について、そのカリスマ性の主張の根拠、世俗権力との関係、遊牧民への宣教などの問題を検討し、その生涯の全体の解明を目的とするものである。この人物に関して19世紀末以来蓄積されてきた先行研究は、スーフィー国家の成立という特異な現象のゆえに、関心を概ね彼の東トルキスタンにおける活動に限定していた。彼の東トルキスタン滞在が12年に及ぶとしても、それは95年と伝えられる彼の生涯の一時期に過ぎず、その前後のマーワランナフルにおける彼の動向をも視野に納める必要があるとの論者の指摘は、肯綮に中っている。第一章では、先行研究が見落としていた諸問題の指摘に続き、本論文が主として依拠する聖者伝を史料として利用するための方法論が提示される。聖者伝が伝える様々な奇跡譚をそのまま歴史的事実として承認することはもとより不可能であるが、それを語り伝える当事者たちの意図と願望は明白に読み取ることが出来る筈であり、同時にそこに言及される聖者と政治権力者を始めとする実在の人物たちとの交渉に関する言説には事実の反映を認めることができるとの論者の見解は極めて妥当であると考えられる。第二章では、主として先行研究に依拠してホージャ・イスハークが歴史舞台に登場する前後のマーワランナフルの状況が概観され、16世紀40年代から90年代末までのシャイバーニー朝の内紛とそれに続く王朝の崩壊の経緯、この地における有力な三つのスーフィー教団、すなわちナクシュバンディー、ヤサヴィー、クブラヴィーの動向が整理される。第三章では、論者自らが読解した複数の聖者伝テクストに依りつつ、マフドゥーミ・アーザムの長男イーシャーニ・カラーンと七男ホージャ・イスハークを始祖とする二つの分派の成立過程が辿られ、兄弟の対立が、彼らの後見であったマフドゥーミ・アーザムの二人の高弟の間の勢力争いに由来すること、父からの後継指名を受けなかったホージャ・イスハークとその与党は、彼が父の最愛の息子であり、その霊性の継承者であることを論拠として、シャイフ位に対する世襲権を主張したことが明らかにされた。第四章では、ホージャ・イスハークの宗教的・政治的活動について、彼が巡歴したマーワランナフルの各地で、他教団のみならず自らの属するナクシュバンディー教団の成員からも妨害を受け、かつ世俗の政治権力者と良好な関係を築き得ず、余儀なく東トルキスタンに進出した経緯が解明された。従来諸説紛々としていたホージャ・イスハー

クの政治的な活動の開始と東トルキスタンへの進出の時期を、聖者伝と年代記史料を照合して、それぞれ1550年代半ば、1578年頃に比定したことは、評価に値する考証である。第五章では、マーワランナフルへの帰還後のホージャ・イスハークがシャイバーニー朝に敵対し、その死の前年に発生したハーンの暗殺に関与した可能性が大であることが示された。附編には、ホージャ・イスハークの死後まもなく記された聖者伝『ズィヤー・アル・クルーブ』（心魂の光輝）の冒頭からおよそ三分の一の校訂テクストと詳細な解題が含まれる。この聖者伝は従来ともしばしば利用されてきたが、先行研究は概ね断片的な引用に終始し、その著者と全体の構成には触れるところがなかった。

本論文が、先行研究が意見を異にしている複数の問題についてより妥当な見解を提示したのみならず、様々な新たな事実を発掘したことは、『ズィヤー・アル・クルーブ』の校訂とともに高い評価に値する。シャイバーニー朝の年代記やマフドゥーミ・アーザムの数多い著作に関する情報を主として先行研究に仰いでいる点は看過し得ぬ問題点であり、この方面に研究を展開することは論者の将来の課題である。なおこの課題とは別に、本論文中に一部言及される、論者が自らの出身地である新疆ウイグル自治区で発見した、従来その存在が全く知られていなかった聖者伝については、速やかにその全容を紹介することが期待される。

以上、審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年1月29日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。